

1 2018年（平成30年）1月～12月の気象概況

1-1 東海地方の天候の特徴

○平均気温（平年差）

1月から2月にかけては寒気の影響で低温でしたが、3月以降は暖かい空気の影響を受けやすく気温の高い状態が続いたため、年平均気温は「かなり高い」となりました。

春（3月～5月）の平均気温（平年差+1.8℃）と夏（6月～8月）の平均気温（平年差+1.6℃）はともに統計を開始した1946年以降では最も高く、年平均気温も統計を開始した1946年以降では最も高くなりました。

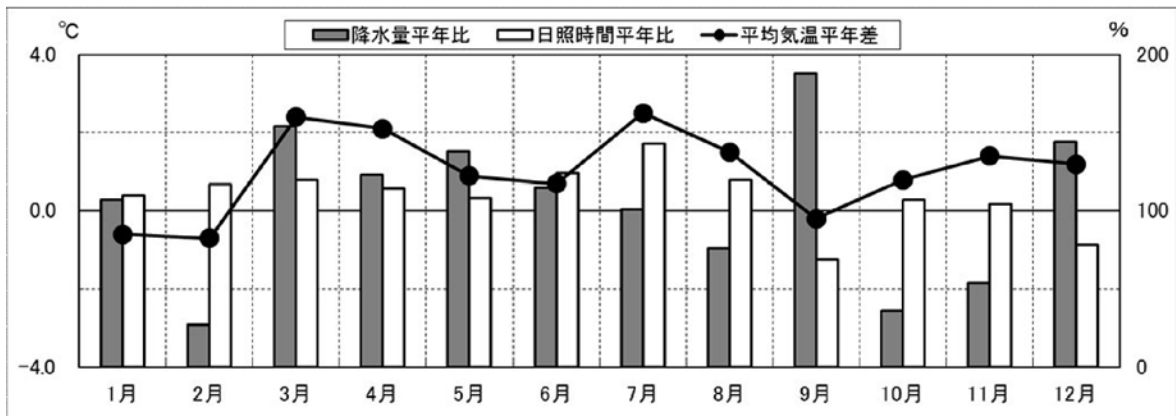
○降水量（平年比）

3月と9月は低気圧や台風の影響で降水量はかなり多くなりました。このため、年降水量は「多い」となりました。

○日照時間（平年比）

1月から2月にかけては冬型の気圧配置となった日が多く、3月以降は高気圧に覆われて晴れた日が多くなりました。このため、年間日照時間は「かなり多い」となりました。

※平均気温、降水量、日照時間については、東海地方平均の特徴を記述しました。東海地方平均とは、東海地方にある気象官署及び特別地域気象観測所（14地点）の平年差・比を平均したものです。



第1図 東海地方平均の月平均気温の平年差、月降水量及び月間日照時間の平年比の推移

1-2 月別の東海地方の天候

1月

冬型の気圧配置となって平野部では晴れた日が多く、岐阜県山間部では雪の降った日が多くなりました。特に、下旬の中頃には冬型の気圧配置が強まり、岐阜県山間部を中心に平野部でも大雪となった日がありました。

2月

前半は寒気の影響を受けた日が多く、平野部では晴れ、岐阜県山間部では曇りや雪の降った日が多くなりました。後半は低気圧と高気圧が交互に通過して、天気は数日の周期で変わりました。

3月

上旬は湿った空気や発達した低気圧の影響で大雨となった所があり、中旬の終わりから下旬のはじめは前線や低気圧の影響で天気がぐずつきました。その一方、高気圧に覆われて晴れの日が続いた時期もありました。また、月を通して暖かい空気に覆われました。

4月

天気は数日の周期で変わりました。上旬後半に一時的に寒気が入ったほかは、大陸で温まった高気圧や日本の東海上に進んだ高気圧に覆われることが多く、晴れて気温が高い日が多くなりました。中旬と下旬には低気圧や前線の影響で暖かく湿った空気が入り、大雨となった所がありました。

5月

天気は周期的に変わりましたが、高気圧に覆われやすく晴れた日が多くなりました。低気圧の通過時には、湿った空気が流れ込み、大雨となった日がありました。上旬の終わりから中旬のはじめは、一時冷たい高気圧に覆われた時期がありました。一方、中旬後半から下旬中頃は気温が高くなり、真夏日となった地点もありました。

6月

上旬から下旬前半までは、梅雨前線が日本の南海上から南岸に位置しやすく、前線の影響で大雨となった日もありましたが、この時期としては高気圧に覆われて晴れた日が多くなりました。下旬後半からは梅雨前線が日本海に停滞し、梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、曇りや雨の日が多くなりました。

7月

太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多く、特に中旬から下旬の前半は厳しい暑さの日が続き、岐阜県では日最高気温が 40 度を超えた所がありました。一方、上旬の中頃は本州付近に停滞した梅雨前線の活動が非常に活発となって、岐阜県を中心に記録的な大雨となりました（平成 30 年 7 月豪雨）。また、28 日から 29 日は台風第 12 号が三重県に上陸して、大雨や暴風になりました。

8月

上旬は太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多く、顕著な高温となり、猛暑日が続いた所もありました。中旬は高気圧に覆われて晴れた日もありましたが、大気の状態が非常に不安定となり、大雨となった所もありました。下旬は、23 日から 24 日にかけて台風第 20 号

が接近した影響で広い範囲で大雨となりましたが、その後は太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多くなりました。

9月

秋雨前線が本州付近に停滞しやすかったため雨の日が多く、特に、8日から10日にかけて前線の活動が活発となって大雨となった所がありました。また、4日は台風第21号が、30日は台風第24号が接近したため、大雨や暴風となりました。

10月

上旬と下旬は高気圧に覆われて晴れた日が多くなりました。中旬は日本の南東海上に停滞した秋雨前線の影響で曇りや雨の日が多くなりましたが、まとまった雨とはなりませんでした。

11月

天気が数日の周期で変わりました。上旬は、中頃に気圧の谷や湿った空気の影響で天気がぐずつき、特に6日は大雨となった所がありました。また、9日は寒冷前線が通過して大雨となった所がありました。中旬と下旬は気圧の谷が通過しても天気の崩れは小さく、晴れた日が多くなりました。

12月

天気は数日の周期で変わり、この時期としては曇りや雨の日が多くなりました。暖かい空気に覆われた日が多くなりましたが、下旬の後半には強い寒気が南下して、岐阜県山間部を中心に雪が降り、平野部でも雪の降った所がありました。

1-3 梅雨

梅雨入り：6月5日ごろ「早い」 (平年：6月8日ごろ 昨年：6月21日ごろ)

梅雨明け：7月9日ごろ「かなり早い」 (平年：7月21日ごろ 昨年：7月15日ごろ)

6月上旬から下旬前半までは、梅雨前線が日本の南海上から南岸に位置することが多く、梅雨入りは6月5日ごろと平年より早くなりましたが、曇りや雨の日は少なくなりました。

6月下旬後半からは梅雨前線が日本海に停滞し、曇りや雨の日が多くなり、7月上旬には梅雨前線の活動が活発となって、岐阜県を中心に記録的な大雨となりました（「平成30年7月豪雨」）。

その後は、太平洋高気圧が張り出し、晴れた日が多くなりました。このため、梅雨明けは7月9日ごろと平年よりかなり早くなりました。また、6～7月の2か月間の東海地方の降水量の平年比は110%で「平年並」となりました。

第1表 梅雨の時期（6月～7月）の
各地の降水量と平年比

地点名	降水量(mm)		平年比 (%)
	2018年	平年	
名古屋	346.0	404.5	86
伊良湖	347.5	338.2	103
岐阜	529.0	506.9	104
高山	757.0	403.0	188
津	402.5	380.7	106
尾鷲	1040.0	802.9	130
上野	500.0	385.9	130
四日市	507.5	466.8	109
静岡	513.5	570.4	90
浜松	443.0	431.3	103
御前崎	439)	473.8	93)
三島	389.5	440.2	88
石廊崎	371.5]	428.2]	
網代	458.0	489.8	94
東海地方平均			110

) : データに欠測等が含まれるが、
正常な値と同等とみなせる値

] : データに含まれる欠測等が多い
ため、正常な値と同等にみなせ
ない値

※石廊崎の降水量は、機器の故障に
より欠測回数が多く、合計値は求
めていますが、平年比は算出して
いません。また、降水量の東海地
方平均の計算にも使用してませ
ん。

1-4 台風

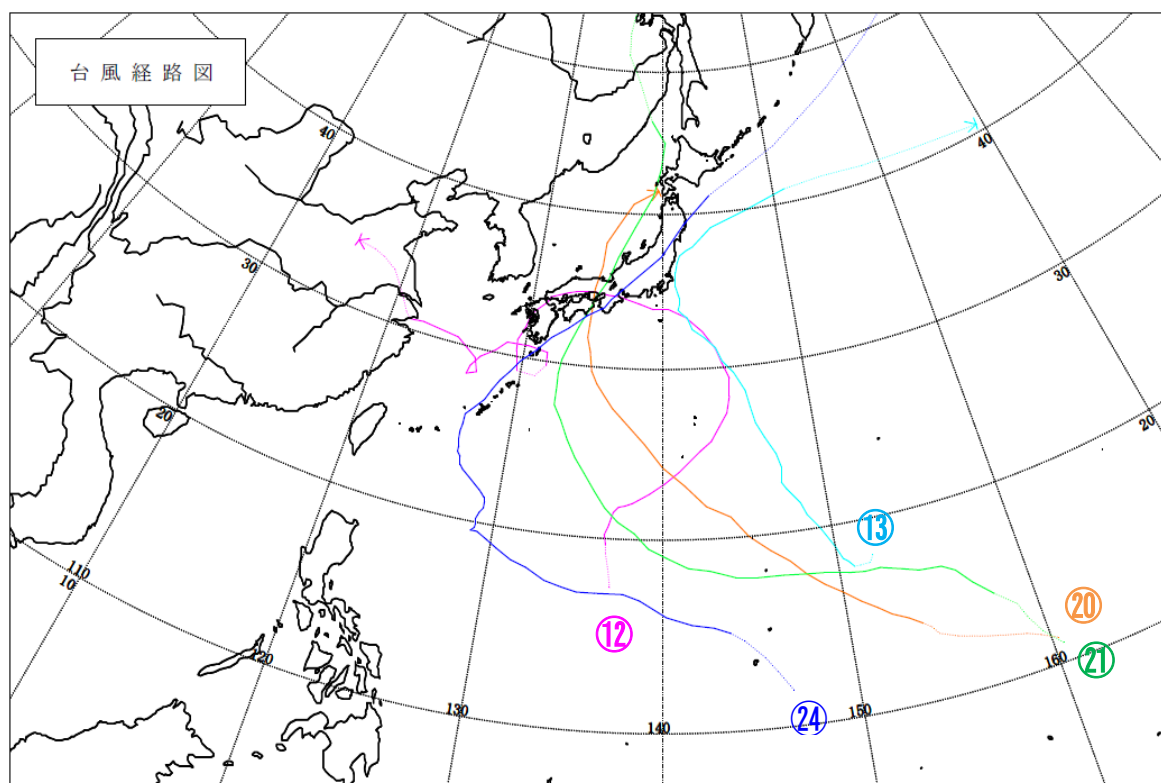
2018年の台風発生数は29個で、平年より多くなりました。特に、8月には9個の台風が発生し、台風の統計を開始した1951年以降、8月の発生数としては1960年と1966年の10個に次ぐ3位タイの多さとなりました。

台風の上陸数は5個（台風第12、15、20、21、24号）、東海地方に接近した台風は5個（台風第12、13、20、21、24号）となり、ともに平年を上回りました。台風第12号は三重県に上陸し、その後、西日本を東から西に横断した初めての台風でした（1951年以降）。

※東海地方に接近した台風とは、その中心が東海地方のいずれかの気象官署及び特別地域気象観測所（富士山を含めた15地点）から300km以内に入った台風を指します。

第2表 台風の発生数・上陸数及び東海地方への接近数

		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
2018年	発生数		1	1	1			4	5	9	4	1	3		29
	上陸数								1	2	2				5
	東海地方への接近数								1	2	2				5
2017年	発生数				1		1	8	5	4	3	3	2		27
	上陸数							1	1	1	1				4
	東海地方への接近数							1	1	1	2				5
平年値	発生数		0.3	0.1	0.3	0.6	1.1	1.7	3.6	5.9	4.8	3.6	2.3	1.2	25.6
	上陸数		-	-	-	-	0	0.2	0.5	0.9	0.8	0.2	0	-	2.7
	東海地方への接近数		-	-	-	-	0	0.2	0.5	1	1	0.5	0	-	3.3



第2図 2018年に接近した台風の経路図（台風第12、13、20、21、24号）

※実線は台風の期間、点線は熱帯低気圧または温帯低気圧の期間